

JGG-INFO-BLATT HERBST 2019

一般社団法人 日本独文学会
JAPANISCHE GESELLSCHAFT FÜR GERMANISTIK E.V.

ニュースレター2019 秋号

JGG-INFO-BLATT / HERBST 2019

まえがき

会員の皆様,

社団法人日本独文学会第一期のまとめ役を仰せつかり、緊張しています。ここにいたるまでには、私も前理事会におりましたのでよくわかっているのですが、清野元会長をはじめ、多くの方々のご尽力がありました。改めまして御礼申し上げます。

新たな出発にあたり、課題を標語的にまとめれば、〈安定化〉と〈スリム化〉、になるでしょうか。社団法人化に伴い、これまでの慣行が通用しなくなる事態が生じるであろうとは、以前から予想されていましたが、学会運営に関して、すでにそうしたことがいくつか出てきています。そのたびに、議論を尽くしながらきちんとした対応を積み上げていくことで、安定した運営の基盤を作ることができれば、と思っています。

〈スリム化〉は、もちろん財政基盤の健全化という最大の懸案事項によって求められているものです。いまご覧いただいている〈別冊〉が、冊子から電子媒体に変わりました—今後の名称も改めて考える必要があります—のも、その一環です。これも、リストラ・業務仕分け、といえはひたすら数字優先の悪役のようなのですが、やはり数字は怖いもので、今の状態を何とかしないといけないことは、会計報告をご覧になればご理解いただけたと思います。

そこで大事なものは、〈学術性〉の担保ということでしょう。具体的に言えば、〈学術情報の発信〉〈人的交流の促進〉〈後進の育成〉に関し、これまでの生産性を維持しつつ、いかにスリム化していくか、ということです。もちろん、無駄なところを切り捨てるだけでそれがかなえば理想的なわけですが、残念ながらそうもいきそうにありません。本当に星のめぐりが悪い、と思うのですが、やはりこれまでも有意義だったものを縮小する、という部分が出てくるでしょう。そのためには、できるだけ早く案を出し、できるだけ議論を尽くすことが必須となります。安定して運営されてきた組織ですから、一年先、場合によっては数年先の予定まで決まっている行事等もあると思います。そこに手を入れるとなると大変です。少なくとも実施に一年はかかるでしょうから、組織改革・事業の見直しについての具体的プランを出すのは、一年目の課題となります。積極的なご意見をお寄せください。

学会運営に関して、もう一つ、引継ぎ事項があります。たとえば学会の事業に携わってくださっている方々で、なにかつらい思いをされることがあったとしても、いまはそれを申し立てる場所がない、なにか手段を講じるべきではないか、

ということが前理事会で話題になりました。これは非常に難しい問題を含んでいて、まず学会の仕事というのは、みなボランティアでやっています。皆さんお忙しい中で、無理に時間を作って仕事を引き受けている。これは全員に共通することであっても、それぞれのグループのなかでバランスの調整がうまくいかない場合も出てくる可能性がある。そうしたとき、特に声を上げにくい人の切実な訴えを受ける窓口のようなものが必要なのではないか。まだ具体的な案はないのですが、これから考えていきたいと思います。ご意見をお寄せください。

また、学会の社会的責任、ということも考えます。社会的にもさまざまな制度に変更が加えられていく昨今ですが、もし、そのなかに学術的に大きな問題をはらんだものが認められる場合、専門家集団として何らかの見解を表明すべきことがでてくるかもしれません—そうした事態に至らないことを祈りますが。

最後に、個人的な話を一つさせていただきます。かつて文化ゼミナールの実行委員長を務めた折には、前年に東日本大震災にともなう痛恨の中止があり、それに加えて例年の会場だったアートランドホテル蓼科が営業を終了することになって、まったく新しい事態に対処することを迫られました。結局一年目は葉山の IPC 生産性国際交流センターで開催し、二年目は、蓼科のホテルの経営者が変わり再開されるということで、これも意見はさまざまだったのですが、結局元の蓼科に戻る、などいろいろなことがありました。制度が変わる時期に、まとめ役となるのは二度目になります。文化ゼミナールでは、すばらしい実行委員会メンバーに支えてもらって無事務めることができました。今回はさらに大役ですが、皆様のお力添えにより、なんとか努めていきたいと思います。どうかよろしく願います。

会長 宮田眞治

目 次

まえがき

募集のご案内

第 18 回日本独文学会賞選考への応募について	1
ドイツ語教員養成・研修講座開講のお知らせ	3
ゲーテ・インスティトゥート奨学金のお知らせ	8
会費納入について	11
一般社団法人 日本独文学会会費規定	12

第 16 回日本独文学会賞受賞について

審査報告書（日本語部門）	14
審査報告書（ドイツ語部門）	16
受賞の弁	19

報告

日本独文学会 2019 年度春季研究発表会報告	25
第 61 回ドイツ文化ゼミナール報告	26
第 24 回ドイツ語教授法ゼミナール報告	34
2018 年度ドイツ語教員養成・研修講座報告	40
日本独文学会研究叢書既刊一覧	42
支部報告	43
ドイツ語教育部会報告	49
2018 年度 全国大学院 Germanistik 関係論文題目	52

その他

訃報	53
----	----

あとがき

54

第 18 回日本独文学会賞選考への応募について

第 18 回日本独文学会賞の選考対象業績を下記の要領により募集します。ふるってご応募ください。

記

1 選考対象

日本独文学会員が執筆し、2019 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに刊行ないし印刷公表されたドイツ文学、ドイツ語学、ドイツ語教育、ドイツ語圏の文化・社会等に関する研究書および論文。自薦、他薦は問わない。なお、日本独文学会機関誌に掲載の論文は自動的に選考の対象となる。

2 部門と選考

次の部門ごとに設けられた選考委員会が、選考にあたる。

日本語研究書部門

ドイツ語研究書部門

日本語論文部門

ドイツ語論文部門

3 年齢制限

日本語研究書部門およびドイツ語研究書部門では特に年齢制限を設けないが、日本語論文部門およびドイツ語論文部門についてはドイツ語学文学振興会賞との重複を避けるため、論文の印刷公表年の 12 月 31 日現在で 36 歳以上の執筆者の論文に限る。

4 応募方法

当該の研究書または論文の原本 1 部を、論文部門の場合には執筆者の生年月日を明記の上（他薦の場合で生年月日が不明なら、その旨を記すこと）、下記宛てに 2020 年 3 月 31 日までに送付する。封筒には「学会賞応募」と朱書すること。

日本独文学会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6-603

Tel: 03-5950-1147

5 選考結果の発表

2020 年度末頃に学会ホームページで公表する。

6 受賞件数

日本語研究書部門・ドイツ語研究書部門：それぞれ 1 件程度

日本語論文部門・ドイツ語論文部門：それぞれ 2 件程度

7 授賞式

授賞式において、受賞者に賞状と副賞を授与する。

授賞式は 2021 年春季研究発表会において行う。

ドイツ語教員養成・研修講座開講のお知らせ

2019年8月

日本独文学会ドイツ語教員養成・研修講座 実行委員会

日本独文学会は、ドイツ語教育部会、東京ドイツ文化センター（Goethe-Institut Tokyo）と共催で、標記講座を開いています。現在開講中の講座は、2019年9月で終了いたします。それに伴い、2019年10月から新しい講座を開講いたします。

なお今回から、オンライン・セミナーをサポートするシステムである ZOOM を用いて、関東・関西の会場に来ることのできない方もワークショップにご参加いただけるようにいたします。全国から多くの会員の皆様の参加をお待ちしています。

講座では、Goethe-Institut の教員養成・研修教材である *Deutsch Lehren Lernen* (DLL) のモジュール4 *Aufgaben, Übungen, Interaktion* を取り入れています。このモジュールを修了した場合、Goethe-Institut で *Grünes Diplom* を取得する際に、既習モジュールとしてカウントされます。

本講座の目標は以下の3点です。講座では、受講者と十分な議論ができる場の形成を目指します。

1. ドイツ語教育について共通の理論的基盤を獲得する。
2. 独力でシラバスを編成し、授業プランを立てて実践できる。
3. 外国語教育を含むカリキュラム全般について科学的根拠に基づいた責任ある発言ができる。

講座の構成

1. オンライン授業
2. ワークショップ
 - モジュール方式でテーマを設定し、オンライン授業では、受講者は課題について Moodle 上で議論するとともに、レポートを担当講師に送り、担当講師からコメントを受信します。
 - モジュールのテーマとしては、「近年のドイツ語教育の傾向；CEFR」「受容的能力（聴く・読む）」「産出的能力（話す・書く）とフィードバック」「様々なメディアと ICT」「自律学習・協調学習、学習方略」などを予定しています。
 - モジュール毎に1回開かれるワークショップ（土曜日午後2～6時）では、後半で課題について講師による導入・解説が行われます。それを基に、受講者はレポートを作成します。次のワークショップの前半で、レポートに関する討論が全体で行われます。
 - ワークショップは、慶應義塾大学日吉キャンパスと甲南大学岡本キャンパ

スの二カ所を会場とし、テレビ会議でつなぎ、実施します。オンライン参加者とは、ZOOM を用います。

講座の概要

1. 参加資格：日本独文学会会員および教育部会準会員（非会員でご希望の方は委員会までご相談下さい）
2. 期間：2年 ただし1年ごとの参加も可能です。初めての受講の場合には、1年目からの受講のみ可能です。2年目からの受講は、過去に前期講習を受講済みの場合に限りです。
3. 開講：2019年10月
4. 申込み受付：2019年8月5日（月）～9月30日（月）
5. 申込み：以下の申し込みフォームから
<http://bit.ly/2Ly8dMa>
もしくは、次のQRコードから、申し込みフォームにアクセスする。

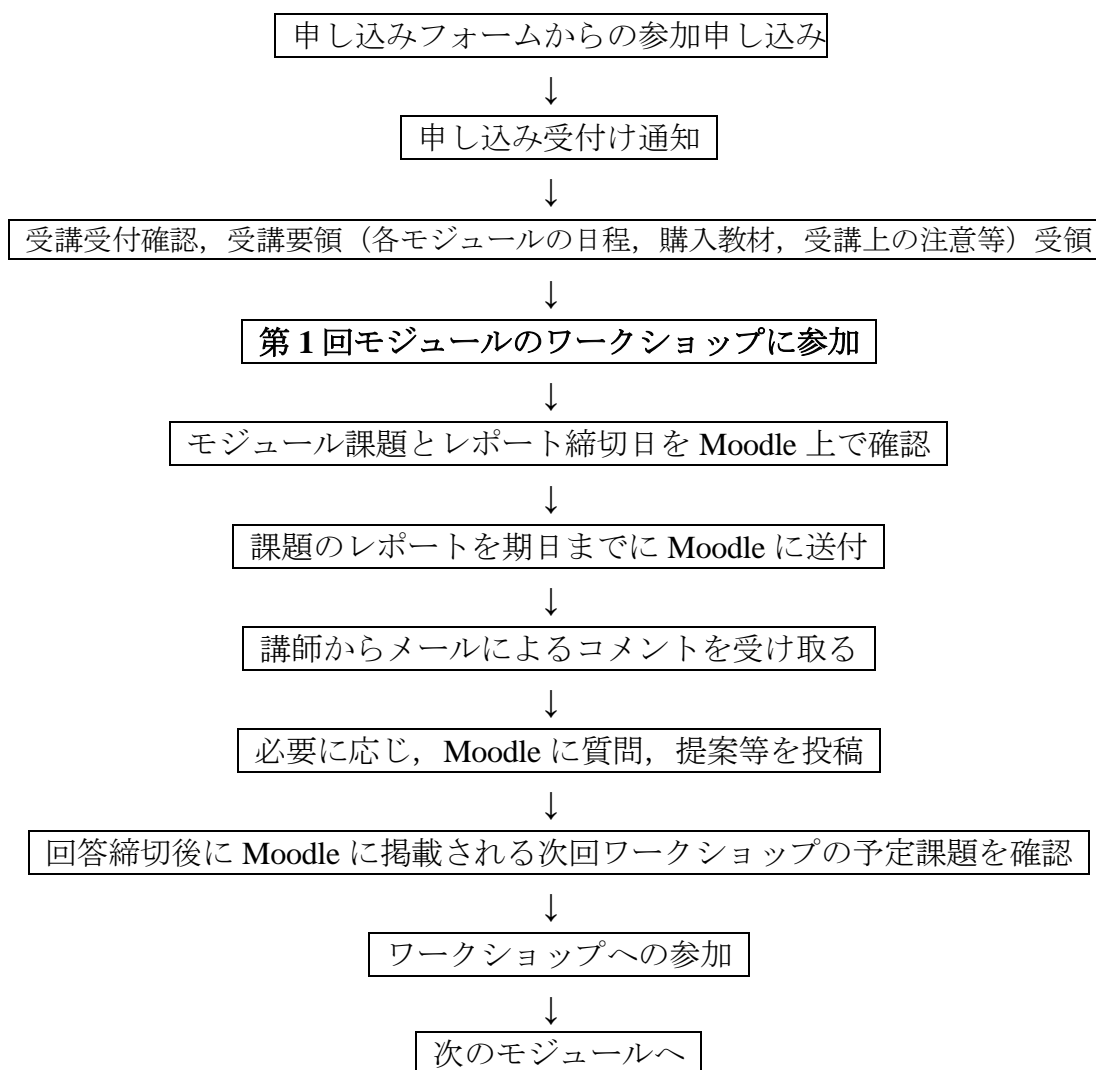


講座参加費（1期1年）：¥32,000（予定；但し、教材費は自己負担。大学院学生は¥3,000割引）

6. 募集参加者数：20名程度（ZOOM参加者は若干名）
7. 参加証：講座修了後、日本独文学会、ドイツ語教育部会、ゲーテ・インスティテュートの連名で発行。
8. 問い合わせ先：日本独文学会ドイツ語教員養成・研修講座実行委員会：
dafkurs-open_at_jgg.jp (at_=>@)
9. 各モジュールのテーマ：別紙参照
10. 授業参観
 - 授業参観は受講者が個別に行います。講座が仲介した授業に出向き、担当教員の授業を参観します。
 - 参観した授業は原則としてビデオで撮影をします。
 - 参観した授業の分析・報告をレポートとして提出し、ワークショップで検討します。
11. 実習（実験授業）
 - 実習は受講者が個別に行います。ただし、勤務校を持たない受講者については、本講座実行委員会が実習校の斡旋をします。
 - 実習に際しては、実習校の教員、または本講座実行委員が **Betreuer** として付きます。

- 実習はビデオで撮影をします。
- 実習者（受講者）は **Betreuer** の指導のもとにレポート課題として実習の報告を作成し、本講座に提出します。
- ワークショップで、実行委員会が選んだ実習ビデオを **Plenum** での検討対象とします。

受講のチャート（申込みから受講まで）



JGG-INFO-BLATT HERBST 2019

ドイツ語教員養成・研修講座 プログラム (予定)

前期 (2019年10月-2020年7月)

ワー クシ ョッ プ	日付	ワークショップとモジュールのテーマ		レポート課題	DLL
		前半	後半		
1	10月	導入：コースへの期待；自身の体験の振り返り	M1: 教授法の変遷と教材分析	教材分析等	
2	11月	M1 のレポートの評価と討論	M2: 受容的能力(聴く・読む)	具体的提案等	
3	12月	M2 のレポートの評価と討論	M3: 産出的能力(話す・書く)とフィードバック	具体的提案等	
4	1月	M3 のレポートの評価と討論	M4: 近年のドイツ語教育の傾向； <i>CEFR</i>	具体的提案等	
5	4月	M4 のレポートの評価と討論	M5: 文法とコミュニケーション	具体的提案等	
6	5月	M5 のレポートの評価と討論	M6: 自律学習・協調学習, 学習方略	具体的提案等	
7	6月	M6 のレポートの評価と討論	M7: ドイツ語授業の参観	授業参観の報告	
8	7月	M7 のレポートの評価と討論	講座の総括		

後期 (2020年10月—2021年9月)

ワークショップ	日付	ワークショップとモジュールのテーマ		レポート課題	DLL
		前半	後半		
1	10月	外部講師による講演	M8: 様々なメディアとICTの導入	教材分析等	
2	11月	DLL 導入ワークショップ (2日間午前・午後; G.I. 担当者)			オンライン学習
3	12月	M8 のレポートの評価と討論	M9: テストと評価	具体的提案等	オンライン学習
4	1月	M9 のレポートの評価と討論	DLL 4, PEP の準備 (G.I. 担当者)	課題なし	オンライン学習
5	4月	DLL 4, PEP の準備 (参加者主体)	M10: 動機づけと意識調査	具体的提案等	オンライン学習
6	5月下旬または6月上旬	Praxiserkundungsprojekt (PEP) プレゼンテーション (1日午前・午後; G.I. 担当者)		PEP を含む実験授業の報告	PEP の実施
7	7月	M10 のレポートの評価と討論	M11: カリキュラムとシラバス		
8	9月	M11 のレポートの評価と討論	講座の総括		



ゲーテ・インスティトゥート奨学金のお知らせ

ドイツ文化センター(ゲーテ・インスティトゥート)は、大学・高等専門学校・高等学校のドイツ語教育担当教員を対象に、ドイツ派遣奨学金プログラムを実施しています。**2019年度募集予定の**プログラムは以下の通りです。

1. ドイツ語教員のためのランデスクンデ・教授法ゼミナール (2-4 週間)
2. ドイツ語教員のための語学ブラッシュアップゼミナール (2 週間)
3. ドイツのゲーテ・インスティトゥートでの通常の語学コース (4 週間)

* 研修期間中の研修費用および宿泊費全額、ならびに旅費の補助金が、ゲーテ・インスティトゥートより支給されます。

<プログラム応募資格 >

大学または高等学校、高等専門学校でドイツ語を教えている、またはドイツ語教員養成に携わっている方のうち、次の条件を満たす方

- 過去数年間にドイツ政府の奨学金を受けていない
- これまでドイツ語教育とその促進に貢献しており、研修終了後少なくとも数年間、ドイツ語教育に携る予定である
- 研修で得た知識を、今後のドイツ語教育に役立つようフィードバックする意志がある
- 研修の全プログラムに参加できる
- 研修の前提となる必要なドイツ語力を備えている

お申し込みは、ホームページ <http://www.goethe.de/ins/jp/lp/lhr/std/jaindex.htm>
または次ページの申込書をA4に拡大コピーし、ご記入のうえ、
2019年9月30日までにメールの添付でお送りください。

問い合わせ/申込：東京ドイツ文化センタードイツ語教員研修支援プログラム係
TEL:03-3584-3201 E-Mail: stipendien_at_tokyo.goethe.org (at_=>@)

JGG-INFO-BLATT HERBST 2019

申込用紙 - Stipendienprogramm 2019: Bewerbung für ein Stipendium

Datum:

	(lateinische Schrift)	(漢字)
Name		
Anschrift		〒
Tel./Fax		Geburtsdatum:
E-Mail		
tätig an	Institution: Abteilung: als	Seit wann unterrichten Sie Deutsch? Mit wie vielen Wochenstunden?

Vorheriger Aufenthalt im deutschsprachigen Raum:

Wo?	
Wann und wie lange?	
Wozu?	
Stipendium?	

Bitte kreuzen Sie an und ergänzen Sie Ihren Wunschtermin:

- Ich möchte an einem **Fortbildungsseminar** teilnehmen (wann?)
- Ich möchte an einem **Deutschkurs für Lehrer** teilnehmen (wann?)
- Ich möchte an einem **Sprachkurs** teilnehmen (wann?)

Anmeldung bitte bis zum 30.9.2019 bei Frau Maruyama / GI Tokyo

stipendien_at_tokyo.goethe.org (at_=>@)

〒107-0052 東京都港区赤坂 7-5-56 Tel. 03-3584-3201 Fax 03-3586-3069

Bitte schicken oder legen Sie bei (auf Deutsch):

- 1) einen akademischen Lebenslauf
- 2) genaue Charakterisierung Ihrer Lehrtätigkeit (didaktische Schwerpunkte, Lehrwerke)
- 3) Inwiefern Sie schon Kontakte zum Netzwerk des Goethe-Instituts hatten
- 4) ein ausführliches Motivationsschreiben für Ihre Bewerbung

会 費 納 入 に つ い て

会員の皆様におかれましては、すみやかな会費納入にご協力いただきありがとうございます。ありがとうございます。

事務局では会員お一人お一人の会費ご納入に関して、年間を通じ必要に応じてご連絡を差し上げています。その際にご理解、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

また、以下の点をご確認ください。

【会費割引制度】

前年度末までに 80 歳になられた方、常勤職をお持ちでない方、学生の方は、ご本人からのお申し出によって、年会費の割引を受けられます。会費規程をご確認の上、事務局までお申し出ください。

【口座自動振替によるご納入】

口座自動振替のお申込みは随時受け付けています。まだお申込みでない方は是非ご検討ください。申込書をお持ちでない方は事務局までご連絡ください。お申込みくださった時点でその年度の手続き締切りに間に合わなかった場合は、自動的に次年度開始の扱いとなります。その年の年会費は振込にてご納入くださるようお願い致します。

2020 年度振替日は 7 月 1 日（水）ですので、すでにご登録の方は事前に口座残高をお確かめいただけますと幸いです。また、振替口座等の変更や年会費割引のお申し出は 4 月末までに事務局までご連絡ください。振替日は年に一度のみです。7 月 1 日（水）に振替ができなかった場合は、郵便振込をお願いしています。

【郵便振込によるご納入】

口座自動振替をお申込みいただいてない方には、5 月、6 月の間に学会年会費納入のお願いと払込取扱票をお送りする予定です。

また、2019 年 10 月 19 日（土）、20 日（日）に成城大学にて開催される秋季研究発表会の会場で、研究発表会参加受付とは別に学会事務局の受付が設置されますので、口座自動振替をお申込みでない方は、そちらでお支払いいただくことも可能です。

以上、よろしくお願い申し上げます。ご不明の点、ご質問は事務局（TEL./FAX : 03-5950-1147, Mail フォーム : <http://www.jgg.jp/mailform/buero/>）までお問い合わせください。

日本独文学会事務局

一般社団法人日本独文学会会費規程

(目的)

第1条 この規程は、定款第7条の規定に基づき、入会金及び会費の納入に関し、必要な細則を定めるものとする。

(入会金)

第2条 会員は入会金として1,000円を納入しなければならない。

(入会金の納期)

第3条 入会金は、この法人から入会承認の通知を受けた日から30日以内に納入しなければならない。

(会費)

第4条 会員は、次の会費(年額)を納入しなければならない。

正会員 10,000円

賛助会員 30,000円(学術交流団体など非営利団体の場合10,000円)

(会費の納期)

第5条 会員は、当該事業年度の7月末日までに、会費年額の全額を納付しなければならない。

(会費の減免)

第6条 4月1日現在で常勤職を持たない正会員の当該年度会費は、本人の申告に基づいて8,000円とする。

- 2 4月1日現在で大学・大学院およびこれに準ずる教育・研究機関に在学する正会員の当該年度会費は、本人の申告に基づいて5,000円とする。申告は、6月1日までに学生証ないしはそれに相当する証明書のコピーを郵送もしくはファックスで学会事務局に提出することによって行うものとする。
- 3 4月1日現在で満80歳以上の正会員の年度会費は、本人の申告に基づいて5,000円とする。申告は6月1日までに行うものとする。
- 4 会費の減免は申告が受理された年度から適用し、遡って適用されることはない。
- 5 常勤職を持たない正会員が常勤職に就いた場合は、身分が変わった直後の4月20日までに身分の変更を学会事務局に届け出るものとする。
- 6 大学・大学院およびこれに準ずる教育・研究機関に在学する正会員の身分に変更があった場合は、身分が変わった直後の4月20日までに身分の変更を学会事務局に届け出るものとする。

(使用目的)

第8条 入会金及び会費は次の各号に定める事項に使用する。

- (1) 本会の運営
- (2) 本会の事業

(細則)

第9条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に必要な事項は、理事会の決議により別に定めることができる。

(改廃)

第10条 この規程の改廃は、総会の決議による。

附 則

この規程は、2019年4月1日から施行する。

第 16 回日本独文学会賞審査報告（日本語部門）

日本語部門審査報告

選考委員は、荒又雄介，嶋崎啓，中村靖子，藤井明彦（委員長），山本賀代（副委員長兼運営委員），山本順子，山本浩司の 7 名（50 音順），審査の対象となったのは 4 点の研究書および 9 編の論文であった。選考委員会は、2018 年 7 月から 2019 年 2 月にかけて開催され，研究書部門，論文部門のそれぞれについて審査を行ない，その結果，次の研究書 1 点と論文 2 編を学会賞候補として推薦することを決定した。以下に推薦理由を述べる。

推薦理由

日本語研究書部門

滝藤早苗：『ライヒャルト—ゲーテ時代の指導的音楽家』（慶應義塾大学出版会，2017 年）

本書は，フリードリヒ大王をはじめとする 3 人のプロイセン国王の宮廷楽長を務めたヨハン・フリードリヒ・ライヒャルト（Johann Friedrich Reichardt, 1752-1814）を，1800 年前後の北ドイツの音楽界を牽引した中心人物として位置づけ，彼の活動がドイツの音楽ばかりでなく文学および文化全般に大きな影響を与えたことを，数多くの原資料に基づいて明らかにしている。ライヒャルトの活動は宮廷楽長の仕事にとどまらず，音楽評論の執筆，音楽雑誌の編集，民衆の音楽教育と極めて多岐に渡っていた。本書は，これまでクローズアップされることのなかったこの人物の活動を丹念な資料探索によって跡づけ，当時の北ドイツの文化史的状況を詳細に且つ生き生きと描写することに成功している。

本書は，序論と 5 つの章と結論から成っているが，第 1 章では，文化の担い手が宮廷から市民階級へと移行する時代のなかで，ライヒャルトが当時の北ドイツの文化人サークルの中心的存在であった様子が活写される。第 2 章以降では，作曲家としてのライヒャルトが本領を發揮したリートをはじめ，オペラ，ジングシュピール，宗教音楽，器楽曲の分野における活動が綿密に跡づけられるが，特にライヒャルトの音楽観を考察した第 5 章最終節が興味深い。そこではライヒャルトが，言語と結びついた真の音楽としての「声楽」に劣るものと考えられていた「器楽」を，その抽象性ゆえに不可視な精神世界へ直接通じるもの，すなわち言語の境界の外側にある神秘的な言語として捉えていたことが周到に論じられている。

日本語論文部門

胡屋武志：機知の思想家としてのフリードリヒ・シュレーゲル—ロマン主義詩学

における歴史哲学、そしてコスモゴニーとしての批評（モルフォロギア 39号）

胡屋氏の論文は、「機知 Witz」をフリードリヒ・シュレーゲルの思想を解明するために不可欠な根本概念の一つとして捉える。「機知」は複数の対象の間にある類似性を発見し、それを結合する比喩的表現を創り出す能力と考えられて来たが、シュレーゲルは「機知」を、異質なものを結合することによって一気に既存の知や体系的思考を超越して、新たな知を獲得する認識能力と見なしている。このような洞察に基づいて胡屋氏は、哲学ならびに文学における「機知」の根本的な役割について論じた後、シュレーゲルの他の概念（「イロニー」、「アレゴリー」、「批評」等）と「機知」との親近性を指摘し、最後に歴史哲学的課題における「機知」の役割について述べる。シュレーゲルは、近代世界を諸要素が関連のない断片となって集積しているカオスと見なしていた。このカオスを構成要素に分解し、再び有機的に結合することで全体をコスモスとして産出することがシュレーゲルの歴史哲学の課題であったが、この再結合という実践において最も重要な役割を果たすのが認識能力としての「機知」である。「機知」に着目して、シュレーゲルにおける様々な独特の概念を有機的に結び付け、シュレーゲルの思想世界における一つの筋道の在り処を明らかにしたところに胡屋氏の論文の独自性と意義がある。

武田利勝：「父によるわが地平の限界」の彼岸に—若きシラーと超越論的終末論（ドイツ文学 154号）

武田氏の論文は、シラーの『哲学的書簡』と『群盗』という初期の作品を手がかりにして、「終末論の空間的把握」という魅力的なテーマに取り組んだ論考である。一般に「終末論」といえば、最後の審判に向かって時間軸上に展開する目的論が想定されるが、これをもっぱら空間的表象として追及していくところにこの論文の独自性がある。武田氏は例えば、強力な父親によって庇護されている空間を囲う「柵」、裁く神と裁かれる我々を隔てる「星輝く天幕」、あるいはサイスの神殿に掛かる「ヴェール」といった、シラーの作品における「境界」のメタファーを抽出して吟味する。此岸の空間に留まりながらも「境界」ギリギリまで迫ろうとする様々な試みを吟味していく武田氏の議論は、近代のいわゆる「コペルニクス的空間」における此岸の拡大と、そこに展開される此岸と彼岸との相克を、抽象的な表現を用いつつもイメージ豊かに描き出している。ひとりシラーにとどまらず、ルクレティウス、ジョルダンノ・ブルーノ、フォンタネルからカントまで、広く呼び出されたテキストは武田氏の論をしっかりと支えておりペダンティックな印象を与えない。また、終末論の基本的文献に則って思想的な流れをおさえつつ、シラー研究における近年の動向にも入念な目配りがなされている。

（文責：藤井明彦）

第 16 回日本独文学会賞審査報告（ドイツ語部門）

ドイツ語部門審査報告

選考委員は、細見和之、Michael Mandelartz、安岡正義、山本佳樹、湯淺英男、吉田光演（副委員長）、我田広之、高池久隆（委員長兼運営委員）の 8 名であった。

審査対象となったのは、研究書部門 3 編、論文部門 12 編である。

選考委員会は、2018 年 7 月 21 日、12 月 16 日、2019 年 2 月 16 日の合計 3 回、岡山理科大学において開催され、本格的な審査を行なった第 2 回、第 3 回選考委員会には全委員が出席した。

第 1 回委員会では、第一次審査の手順・担当などを決定した。語学・DaF 系の 5 編を語学・DaF を専門とする委員 2 名が、文学・思想系の 10 編を文学・思想を専門とする委員 6 名が担当し、論文、研究書ごとに 5 段階評価を行なった結果を、次回委員会に持ち寄ることとした。

第 2 回委員会では、評価一覧表に基づき、論文、研究書ごとに評価担当者が説明を行なった後、議論に移り、第二次審査の対象となる研究書 2 編、論文 8 編を決定した。

第 3 回委員会では、評価一覧表に基づき、論文、研究書ごとに評価担当者が説明を行なった後、全委員による議論を行ない、第二次（最終）審査の結果として、以下の通り研究書 1 編、論文 2 編を学会賞候補として推薦することに決した。

推薦理由

ドイツ語研究書部門

Shinichi FURUYA: *Masse, Macht und Medium. Elias Canetti gelesen mit Marshall McLuhan.* (Bielefeld: transcript Verlag 2017)

古矢氏の研究書は、Elias Canetti の著作を Marshall McLuhan の Medientheorie を媒介として読み解こうとする斬新な業績であり、Canetti の Massentheorie と McLuhan の Medientheorie を共に考察の対象とすることによって、著者は Medientheorie と Anthropologie を結びつけようと試みる。Canetti が McLuhan に及ぼした影響関係を具体的に検証しようとする作業は緻密である。また、Canetti をメディア論的に読むうえで、視覚、聴覚、触覚に区分し、それぞれに関して、作品 *Die Blendung*, *Die Stimmen von Marrakesch*, *Masse und Macht* を主題的に論じるという明快な構成が採用されている。形式の面から見れば、ところどころに、それまでの論述を適宜概観し、後続の論述への橋渡しの役割を果たす文言を置くことにより、論旨の流れを把握しやすくする配慮がなされている。現代の思想動向

に目配りしつつ古典的著作を有機的に取り込む手堅い論述, Canetti に関する内在的考察と外在的論究の見事な組み合わせ, などを高く評価し, 授賞に値する優れた研究書として推薦するものである。

ドイツ語論文部門

Kentaro KAWASHIMA: Recht und Literatur in Benjamins Essay *Franz Kafka*. (Neue Beiträge zur Germanistik, Band 16 / Heft 1)

川島氏の論文は、『ドイツ文学』155号における Benjamin 特集のために寄稿された論文である。著者は, Benjamin における Recht と Literatur の関係を明らかにするにあたり, Benjamin のエッセー *Franz Kafka* に注目しつつ, Benjamin における重要な対立的区分, Recht と Gerechtigkeit をより正確に規定しようとする。すなわち, Kafka-Essay を Benjamin が *Kritik der Gewalt* において提示した対立的区分, Recht と Gerechtigkeit を引き継ぐものと明確に位置付け, 粘り強く論を展開する。Kafka の短編 *Der neue Advokat* および Benjamin の Kafka-Essay に焦点を当てた緻密な読解を通じて, Benjamin にとっての Recht の問題の意義・重要性が十分に提示されている。限られた紙幅という条件のもと, いたずらに対象の広がりを追うのではなく, むしろテーゼの明快さ, 先行研究及び二次文献への周到な目配り, 緻密な読解, 説得力ある論拠の提示, に注力する姿勢を感じとることができる論考である。加えて, Benjamin 自身の議論が持つ晦渋さに引きずられることなく, 自らの論旨を展開しえていることも評価すべき点である。以上の理由により, 選考委員会は当該論文を授賞にふさわしいものとして推薦することを決した。

(以上, 文責 高池久隆)

Yasuhiro FUJINAWA: Licht und Schatten der kategorischen/thetischen Aussage: Kopula und Lokalisierungsverben im deutsch-japanischen Vergleich. (Linguistische Berichte, Sonderheft 24)

判断には複合判断(kategorisches Urteil)と単独判断(thetisches Urteil)の区別があるという Marty (1918)の議論は Kuroda (1972) によって再評価され, 日本語の「は」と「が」の区別にも援用されたが, ドイツ語ではその区別は統語的には一見明確には現れないように見える。しかし, 本論文はドイツ語にも2つの判断の区別が統語的に存在することを主張し, 日本語とドイツ語のコピュラ(「だ」と sein)の所在(存在)表現としての機能の分析, 命令文と希求文(Optativsatz)の比較, 感覚動詞の補部としての小節(Small Clause)における潜在的コピュラの分析を通してこの区別を具体的に示した。それによって, 系統的に異なる両言語において, 複合判断タイプの場合にのみコピュラが所在表現として機能することを明らかにしたこ

とは理論的にも高く評価できる。

本論文の新規性は、命令文と希求文という特殊な文タイプで *kategorisch/thetisch* の区別があることを示した点である。命令文は聞き手を主語とし、話し手・聞き手が共有する先行文脈に根ざしており、*doch, ja* などの心態詞と共起する。その意味で命令文は主語が前提された複合判断タイプである。他方、希求文は1・2人称代名詞と相容れず、心態詞も共起しないという意味で単独判断タイプである。本論文はこの相違を例文の精密な検討によって示した。さらには、*sein* を所在表現として使うことができるのは命令文であり、希求文ではこれが不可能であることを指摘し、コピュラ *sein* の機能が2つの判断の区別に基づくことを説得的に論じている。

glauben などとは異なり、*finden, scheinen* などの感覚・知覚動詞では、"#Ich fand sie zu Hause."のような場所句が小節の述語として現れることができない。それは、*finden, scheinen* といった知覚動詞が示す知覚が話し手・聞き手の共有体験ではなく、個人的経験に基づくもので、それ故単独判断的であり、複合判断タイプの所在表現とは相容れないからであるとする。知覚動詞の相違によって、目に見えない潜在的コピュラにおいても2つの判断タイプの区別が一貫して現れるという興味深い分析を行っている。

ドイツ語では2つの判断がなぜ截然と区別されなかったのかについても本論文は言及している。ドイツ語は、時制文において主語が常に要求される *kategorische Syntax* である故に「疑似複合判断文」が現れ、形式・意味のずれが生じ、2つの判断の区別を困難にしている。また、談話・伝達構造への関心のために複合判断に焦点が集まり、単独判断についてこれまで十分議論されてこなかったと述べている。しかし、タイトルの *Licht und Schatten* が示すように、後者に対してさらに光が当てられるべきだという指摘は未だ示唆の段階に留まるものの、興味深く、今後さらなる研究が期待される。 (文責 吉田光演)

受賞の弁 日本語研究書部門

滝藤 早苗

このたびは、このような名誉ある賞をいただきまして大変光栄に存じます。受賞作『ライヒャルト——ゲーテ時代の指導的音楽家』は、2016年に慶應義塾大学に提出いたしました博士論文の一部をまとめ直し、加筆修正したものになります。論文の執筆から本書の刊行に至るまで、非常に多くの方々のご助力とご指導を賜りました。この場をお借りしまして心よりお礼申し上げます。また、この学会賞の審査にあたり、拙著を辛抱強く最後まで読んでくださいました選考委員の先生方にも、大変感謝いたしております。

ヨハン・フリードリヒ・ライヒャルトは、フリードリヒ大王をはじめとする3人のプロイセン国王の宮廷楽長を務めた音楽家です。彼の作品は今日ではほとんど忘れられていますが、ひとたび当時の北ドイツの知識階層と音楽の関連について注意を向けると、必ず目にするようになるのがライヒャルトの名前であり、彼が当時の北ドイツの音楽界を牽引していたキーパーソンであったことが明白になります。たとえば、彼は友人のゲーテと協力してリートやジングシュピールなどの声楽曲を多数制作し、E. T. A. ホフマンをはじめとするロマン派の詩人たちを音楽の世界へ導きました。しかも彼の活動領域は、作曲や演奏といった一般的な音楽家の仕事だけにとどまらず、音楽評論や紀行文の執筆、雑誌編集、民衆教育、政治評論など多岐にわたっています。それゆえに拙著では、この多才な音楽家に注目し、彼の活動がドイツの音楽や文化に与えた影響力の大きさを論証することを目的としました。

これまでライヒャルトは、音楽研究においては啓蒙時代の古いタイプのリート作曲家、文学研究においては単なるゲーテの友人の一人であるとして過小評価され、両分野の狭間でその重要性が見落とされてきました。しかし、彼は宮廷楽長という肩書からは全く想像できない、他に類を見ない非常にユニークな存在であると言えます。拙著を通じて一人でも多くの方々に、ライヒャルトという人物と彼を取り巻く世界の魅力を知っていただき、それにより従来のイメージを変えることができれば、私にとってこれ以上の喜びはございません。

(慶應義塾大学講師)

受賞の弁 日本語論文部門

胡屋 武志

本論文の着想が生じたのは2006年、母校の交換制度を用いて30代半ばでボン大学に在籍していた頃である。学生寮近くの数学図書館で日々シュレーゲルのテキストを眺め、メモを取りながら見えてきたのは、彼の歴史哲学の中で働く機知の概念の意味と役割の大きさである。帰国して早稲田の学会にてこのテーマで発表し、論文の完成を目指したが、骨格となる構想を掴んだ感触だけはありながら、首尾一貫した論述に至らなかった。試行錯誤を重ねるうちに別のテーマへと関心が移り、機知の概念は研究の片隅へ追いやられた。この間に社会は大きく変動し、私の生活や仕事の環境も変化した。再び機知に取り組むも、今度は簡単には完成させたくないという力が働き、宇宙論、発明術、無意識などの観点からこのテーマを再考した。2016年にゲーテ自然科学の集いで発表の機会を頂いて構想は大きく進展し、改稿した原稿を『モルフォロギア』に投稿し、2017年に論文として陽の目を見ることができた。相当に緩慢なペースで出来上がった一本だが、だからこそ日本独文学会賞の受賞はこの上なく大きな喜びとなった。

フリードリヒ・シュレーゲルの思想という複雑な多面体の中で、機知の概念はそこごく一部の要素に過ぎない。しかし、同時にそれは、彼の思想的宇宙の全体を貫く認識と思考の方法となっている。機知は、稲妻の如き激烈な直観と俊敏な思考がもたらす異質なものの混合であり、今いる世界から別の世界へと移動する内的な自由を意味している。それは効率や有用性の強制から遠く離れたところで可能な精神の自由であり、ゆえにシュレーゲルの機知は、現代に生きる人々が世界と自分自身とを見つめ、考えるための鏡／鑑になると私は考えている。

このたびの学会賞受賞という身に剩る光栄に与れたことで、今後も研鑽を重ね、シュレーゲル研究に邁進する意を強くしている。この場を借りて、拙論を審査して下さいました選考委員会の先生方へ、そして、私のシュレーゲル理解がその多くを負い、大学院時代から今に至るまでお世話になり続けている酒田健一先生へ、ご指導いただいた学恩ある先生方へ、お世話になり、ときにご迷惑もおかけした全ての方々へ、最後に家族へ、心より感謝の意を申し上げます。

(宮崎大学准教授)

受賞の弁 日本語論文部門

武田 利勝

人生の羈旅も半ばをとうに過ぎて、見失うべき正路もどこへやら、こうも行き当たりばったりの仕事ばかり続けていいのだろうか、と日々煩悶していた折もあり、特集「黙示録とユートピア」に投稿しないか、と声をかけていただいたのは2016年の春のこと。思い返せばそれ以前、職場の同僚小黒教授主催による科研プロジェクト「ドイツの文学・思想におけるトポスとしての〈黙示録文化〉」、その末席に加えていただいてから、それまでまったく縁遠かった「終末論」というテーマについて考える機会を与えられていたというのは奇縁というか、因縁というか。ともあれ九大で開催される科研コロキウムでは国内外の研究者による優れた研究発表を拝聴し、その他の場（とくに酒席）にあっては同僚による高熱量の黙示録論に耳を傾けるうちに、当初はこの「トポス」の外周で途方に暮れていた不束者のわたくしも、段々と自分なりの「終末観」のようなものを、ぼんやりと持つまでにはなっていました。

とはいっても、どうしても書いてみたかったイメージはたった二つ。一つはカントが「万物の終末」でふと漏らす、「深淵」としての「終末」をめぐる一節で、つまりその深淵はなにか特別な魅力を持っており、だから人は「ひとたび恐れおののいた眼差しを、また幾度となくそこへと向けざるを得ない」——カントらしからぬ、妖しくも甘美な表現。もう一つは、シラー『群盗』、フランツ・モールの台詞——「夢には何の意味もない!」。黙示録的な悪夢におびえる凡庸な悪人があげるこの悲痛な叫びにこそ、ドラマの全体が集約されているような気が以前からしていたのですが、ここにカント描く甘美な不安を重ねることで、ひとつの物語が書けそうな予感がありました。

と同時にそれは、世界史的・宗教史的な次元での黙示録思想ではなく、懐疑と不安のはざままで必死に均衡を保とうとするひとりの近代人を描く作業になるはずでした。こうした仕事が果たして特集テーマに沿うものになるかどうか心配ではありましたが、家族、友人、同僚、また講義や演習の場でわたくしのお話を聞いてくれる学生諸君の励ましのおかげで、何とかかたちになりました。そしていささか場違いにも見える拙論を受け入れてくださったばかりか、著者の知識不足によるミスの数々を丁寧にご指摘くださった機関誌編集委員の皆様の献身的なお仕事ぶりに、心より敬意と感謝の念を表したいと思えます。ありがとうございました。

(九州大学准教授)

受賞の弁 ドイツ語研究書部門

古矢 晋一

このたびは第16回日本独文学会賞をいただき、大変光栄に存じます。ご多忙の中、審査の労を取られた選考委員の先生方に感謝申し上げます。

拙著は2014年にルール大学ボーフムに提出した博士論文が基になっています。この場を借りて、ご指導いただいたマンフレート・シュナイダー先生（ルール大学ボーフム名誉教授）、ヨーゼフ・フルンケース先生（慶應義塾大学名誉教授）に心よりお礼申し上げます。また留学を可能にいただいたDAADに対して、さらにドイツと日本で論文の執筆を支えてくださった多くの方々に対して、一人一人お名前を挙げられない非礼を承知しつつも、心より謝意を表明します。ありがとうございました。

本書は『群集と権力』を中心にカネッティの代表的な作品をメディア論の文脈で論じたものです。1960年に出版された『群集と権力』では新聞の読者が「扇動群集」というカテゴリーにおいてわずかに言及されているだけであり、ではラジオやテレビの利用者はカネッティの群集論からすればどのように論じられるのか——それが本書の出発点となる問題意識でしたが、その際に重要な参照枠となったのが、カネッティの『群集と権力』を早い時期に受容したマーシャル・マクルーハンのメディア論でした。拙著は、「人間の拡張としてのメディア」という観点からカネッティの『群集と権力』を取り上げたマクルーハンの理論を梃子に、カネッティの思想と文学活動における「メディア」の問題を顕在化させ、その意義を明確にすることに焦点を絞りました。

拙著の出版後、2018年にカネッティの書簡集が公刊されました。1965年のカネッティのある手紙では、実際にマクルーハンがロンドンにいるカネッティを訪れ、カネッティの著作に対する親近感を述べたこと、しかしカネッティの側ではマクルーハンの話にそれほど興味を覚えなかったことが記されていました。どうやら両者の関係は、マクルーハンの片思いだったようです。カネッティとマクルーハンの著作を並べて論じた拙著は、カネッティからすれば偏ったものだったかもしれません。しかしまたカネッティは1993年の晩年の手紙において、「群集結晶体」という『群集と権力』の概念でテレビを理解しようとするある研究者のアイデアに賛意を表明してもいます。

カネッティの意図とは関係なく、『群集と権力』について、その出版後に激変したメディアテクノロジーの環境を意識しつつ論じることは、当然ありえるでしょうし、また実際、先行研究においても部分的になされてきました。拙著もまたそのような読解に際して少しでも参照され批判されるならば望外の喜びです。

(立教大学准教授)

受賞の弁 ドイツ語論文部門

川島 建太郎

「法と文学」というテーマに出会ったのは、ボーフム大学で学び始めた 2001 年のことである。この秋・冬学期、指導教授のマフレート・シュナイダーが「自然法と文学」というテーマでコロッキウムを開催していたのである。これは、日本の大学院の授業よりもずっと幅広い年齢層の参加者からなる研究会で、ドクトラント以外にも、ポストドクや、教授の長年の共同研究者が複数名、参加していた。配布された 300 頁近い分厚いリーダーには、アリストテレスや『ローマ法大全』から、自然法のディスクールが隆盛した 17 世紀の思想家（グロティウス、プーフェンドルフ、ホッブズ）を経て、ルソー、クライスト、そしてヴァーグナーとニーチェに至るまでの一次文献の抜粋が収められていた。それらをもとに、ヨーロッパの自然法をめぐる言説史を概観しようというのである。

念願のドイツ留学一年目の私は、毎回リーダーを熟読して一度も欠かさずにこのコロッキウムに出席したけれども、当時は何が問題になっているのかよく理解できなかった。未知のテーマだったから、というだけではない。コロッキウムの参加メンバーは 20 人弱だったと記憶しているが、その多くは、長期にわたり「法と文学」をめぐる共同プロジェクトを通じて議論を重ね、問題意識を共有しており、コロッキウムでの個々のステートメントの背後にはどのような思惑があるのか、お互いにすぐさま見抜きあうような関係であった。かように濃密な関係性の場に外からいきなりやっても、議論についてゆくことすらも容易ではなかった。しかし内容の理解以前に、肌感的に、この場では何か最先端の議論が交わされている、という予感があった。

私はこうしてある種のカルチャーショックのように「法と文学」の問題系に出会ったが、その後もシュナイダー教授とその一門の方々の指導のもと、この分野の勉強を地道に続けた。それでようやく、ベンヤミンの「暴力批判論」の意義や、「例外状況」をめぐるベンヤミンとカール・シュミットの危険な関係や、現代思想がこの両者の対決にくり返し立ちかえる意味が分かってきたのである。ボーフムの師と友人たちに、この場を借りてあらためて感謝の意を表したい。私の書く論文は、今なおあのボーフムのコロッキウムに端を発するものが少なくない。

忘れもしない 2015 年 9 月、安倍政権によりいわゆる安全保障関連法が強行採決されて以来、日本でも「例外状況」や非常事態の問題系に関する独文学の立場からの研究が喫緊の課題となった。このような時勢の要請に対して、私の研究はまだ途上である。これを機に、さらに研究を深化し、拡大させてゆかなければならないと思う次第である。（慶應義塾大学教授）

受賞の弁 ドイツ語論文部門

藤縄 康弘

拙論の標題にある *kategorisches Urteil* と *thetisches Urteil* は耳慣れない用語かもしれませんが。両者は 19 世紀ドイツ語圏スイスの言語哲学者 Anton Marty が師 Franz Brentano の思想を継承・発展させた論理学の概念であり、Marty は「複合判断 (*Doppelurteil*)」、「単独判断 (*einfaches Urteil*)」とも呼んでいます。当事者の死後、長らく埋もれていましたが、1972 年、その言語体系への反映をヨーロッパ諸語よりも日本語のほうにいつそう強く見出した日本人言語学者 S.-Y. Kuroda が、ハ主語文とガ主語文をそれぞれ前者と後者の表現であると主張したことで、言語学の分野では比較的知られるようになったものです。

拙論の中核をなす問いは、本当に両種判断の区別はドイツ語の体系に関与しないのか、です。むろんドイツ語でも、ハ主語文に対するガ主語文の効果はアクセントや語順等によって表現可能ですが、だから即、当該ドイツ語の表現と日本語のガ主語文とが言語体系上の価値まで共有するとは言えません。そもそも言語体系上の等価性はどのように計れるのでしょうか？ Kuroda や彼に続く研究ではこの点が明らかではありませんでした。そこで拙論は、文の基本構成要素としての *Kopula* に注目し、その振舞いが試金石になり得ないかを試したのです。

ドイツ語でも日本語でも、*Kopula* は位置表現 (*Aki ist zu Hause* 「アキは家だ」) に使用可能ですが、この可能性は日本語の場合、ガ主語文の下で何故か閉ざされます («アキが家だ」は「アキが家にいる」の意味では不可)。他方ドイツ語では、確かに通常の主文表現を見る限り、ガ主語文の効果を持つ表現方法が同様の結果に至ることはないものの (主語アクセントの *Áki ist zu Hause* も後置主語の *es war einmal ein König in Thule* も可)、希求文や一部の小節 (*small clause*) といった周辺の文表現に目を向ければ、顕在的・潜在的な *Kopula* はやはり位置表現としては不適合であることが付き止められたのです (例えば *hier stehe nur ein Beispiel* 「ここに一例あらん」の意味で *hier sei nur ein Beispiel* は不可、など)。

今回このように、これまでまったく陰に埋もれていたドイツ語の現象に光を当てることができたこと、しかも、系統的に無関係の日本語と思いがけず通底するかたちで掘り起こせたことは、徐々に味わう知的興奮でした。今後は、*Kopula* が何故、通言語的にこのような振舞いをするのかを解き明かし、それを端緒として言語と認識の関係の深みにより一層踏み込んでいきたいと考えています。

最後に、このような発展途上の論考を積極的に評価して下さった審査委員諸氏に心よりお礼申し上げます。
(東京外国語大学教授)

日本独文学会 2019 年度春季研究発表会報告

2019年6月8日、9日両日、学習院大学目白キャンパスにおいて春季研究発表会および任意団体日本独文学会第74回総会および後継組織となる一般社団法人日本独文学会社員総会が開催され、454名が参加した。

研究発表会の内訳はシンポジウム8本、口頭発表16本、ブース発表2本、ポスター発表5本のほか、ディートマー・レスラー氏を迎えての招待講演、ドイツ語教育部会総会、ドイツ語教育部会による「大学ドイツ語入試問題検討委員会」展示発表、第16回日本独文学会賞授賞式、第59回ドイツ語学文学振興会賞受賞式、書店・出版社による各種展示が行われた。

(企画担当)

第 61 回文化ゼミナール報告

第 61 回文化ゼミナールは、2019 年 3 月 17 日（日）から 22 日（金）まで、リゾートホテル蓼科（長野県茅野市）で開催された。招待講師は Norbert Otto Eke 教授（パーダーボルン大学）、アジア人ゲスト講師は Ahn Mi-Hyun 教授（木浦大学／韓国）。

総合テーマ：Literarischer Habitus

参加者：Ahn Mi-Hyun (Mokpo National University), 馬場大介 (立教大学), *Stefan Buchenberger (神奈川大学), *Marcus Conrad (名古屋大学), Norbert Otto Eke (Universität Paderborn), Marta Famula (Universität Paderborn), *深澤一輝 (東京大学), Robert Gisselbaek (Université de Genève), 原千史 (福山大学), 橋本紘樹 (京都大学), 林英哉 (京都大学), 林弘晃 (九州大学), 日名淳裕 (成城大学), 久山雄甫 (神戸大学), 飯田澄子 (東京大学), 池中愛海 (慶應大学), 石橋奈智 (東京大学), *磯崎康太郎 (福井大学), 亀井一 (大阪教育大学), ***川島建太郎 (慶應大学), 川島隆 (京都大学), *小林和貴子 (学習院大学), **香田芳樹 (慶應大学), 小松原由理 (神奈川大学), *桑原聡 (新潟大学), 宮田眞治 (東京大学), 森下勇矢 (東京大学), 中村大介 (慶應大学), *西尾宇広 (慶應大学), 二藤拓人 (立教大学), 小俣登糸美 (東京大学), 大宮勘一郎 (東京大学), 大澤遼可 (九州大学), Ludmila Peters (Universität Paderborn), *Manuela Sato-Prinz (DAAD), *Eberhard Scheiffele (早稲田大学), 七字眞明 (慶應大学), *下菌りさ (駒澤大学), 副島美由紀 (小樽商科大学), Heinz Steinberg, 菅谷優 (東京大学), 高田梓 (東京大学), 田中すみれ (早稲田大学), 田中潤 (早稲田大学), 谷本知沙 (慶應大学), Johanna Tönsing (Universität Paderborn), 若山真理子 (東京大学), René Wetzl (Université de Genève), Katharina Wimmer (Université de Genève), 山本浩司 (早稲田大学), 山本潤 (東京大学), 山下大輔 (京都大学), 吉川侑里 (早稲田大学)

(アルファベット順, ***担当理事, **実行委員長, *実行委員)

総合テーマについて

「精神と肉体」という二元論に支えられていたかにみえるヨーロッパ精神史には、実は第三の極「ハビトゥス」が存在した。アリストテレスが倫理学で「徳の完成」と定義した時、ハビトゥス(エトス)は西欧倫理学の重要な課題となった。それは、プルタルコスが「徳は学び得るか」への答えとしてハビトゥスをあげたように、開かれた市民社会での人格陶冶の可能性と考えられたのである。キリスト教倫理と封建制が支配的な西欧中世においては、徳をめぐる議論は制約を受け

るが、それでも中世後期以降、数多くのハビトゥス論がトマス・アクィナスを初めとするスコラ学者によって論じられ、人間の成長に個人の努力を見ようとした。やや時代を後にするが、16世紀以降、多くの『作法書』が書かれたことは、宮廷社会が新たなハビトゥスの確立を求めていることを示している。ハビトゥスは、N. エリアスの言うとおりに、文字通り「文明化の過程」を表現していたのである。しかしこうした人間学的な徳理解は、ドイツ観念論哲学には受け継がれず、理性が「人間は何を為すべきか」を決定していると考えられるようになる。イギリス経験主義の影響を受けたフランス哲学はこうした理性主義の陥穽を逃れて、徳の源泉を日常行動の繰り返し、すなわち「習慣」に求めた点で画期的である。ルソーから、メヌ・ド・ビラン、ラヴェッソンを経てベルクソンに至るフランス・スピリトゥアリズムの哲学者たちは、個人の社会的自己形成の要因としての習慣の地位を確立した。また道德の源泉をハビトゥスと考えることは、「身体」、「生活」、「感情」といった文化史的な要素を人間理解の対象にすることを可能にした。社会学者 P. ブルデューが論じた、社会層とハビトゥスの関係もこうした文化史的考察の一つと位置づけられる。「同じ集団には共通する経験の統一的な統合」があるという考えは、文学研究にも大きな影響をあたえ、作家個人と社会の「趣味」の関連を読み解く研究が数多く発表された。本ゼミナールの目的はそれゆえ、1) 古今のドイツ語で書かれた文学作品を、精神と肉体といった対立軸とは別に、新たに「習慣」「ハビトゥス」といった観点から再解釈することと、2) 作品が、ある特定の社会的 Feld の中で書かれたことを明らかにすることであった。これらにより、「文学的ハビトゥス」の学術的重要性を多面的に再認識することができた。

第1日

担当理事による挨拶、実行委員長による簡単な導入の後、招待講師による基調講演が次の題目でもたれた。

Eröffnungsvortrag (20:00-21:30)

Norbert Otto Eke: „Regeln der Kunst: Habitus, Literatur und ästhetische Form“

ヨーロッパ精神史における、アリストテレス以来のハビトゥス理解を歴史的に解説した後、特に Pierre Bourdieu (1930-2002)に焦点を当てて、社会学的術語の文学研究への応用例である、いわゆる Feldtheorie が紹介された。ハビトゥスとは、「持続的転換可能な資質のことであり、構造化された構造であり、構造化する構造である」という定義通り、「習慣」と重複しつつもそれを越えて、ある特定の階層やイデオロギー集団に典型的な行動様式と趣向の形成因として理解される。これらがつくる Feld と、その中で Feld を形成しつつ形成される芸術活動との力関係を明らかにするのが Feldtheorie であることが論じられた。

第 2 日

Plenarvortrag I (9:00-12:00)

René Wetzel (Université de Genève): Partizipation – Mimesis – Habitus. Pädagogisch-didaktische Spiegeleffekte im „Welschen Gast“ (1215/16) Thomasins von Zerclaere.

宮廷的ハビトゥスの形成過程を多角的に考察する本発表では、トマジン・フォン・ツィルクレーレの手になる中世の代表的な教育詩『異国の客人 Der welsche Gast』を題材に、模倣による規範の内面化によってハビトゥスの構築と恒常化が図られていること、さらにそこでは「鏡」の隠喩が重要な役割を果たしていることが論じられた。

Robert Gisselbaek (Université de Genève): Eine Frage des Geschmacks. Höfische Dichtung im Mittelalter zwischen Macht, Moral und Mäzenatentum.

庇護者の存在を前提とする中世の文芸創作において、庇護の対象となるべき作品を決定する尺度（趣味）がどのように形成されたのかを問う本発表では、コンラート・フォン・ヴェルツブルクを例に、近代の「趣味」論やブルデューによる社会的判断力の議論の射程を中世文学の分析にまで（必要な修正を加えつつ）拡張する野心的な試みが展開された。

Takashi Kawashima (Universität Kyoto): Franz Kafka im Kontext des „jüdischen Selbsthasses“ seiner Zeit.

反ユダヤ主義の内面化としての「ユダヤ人の自己嫌悪」と体操文化をはじめとする「生活改革運動」の交差点にフランツ・カフカを位置づける本発表では、O. ヴァイニンガーやK. クラウス, M. ノルダウといった同時代言説を豊富に参照しつつ、1900年頃のユダヤ人の集合的ハビトゥスが「身体」という場を中心に形成されていくさまが包括的に検討された。

Gruppenarbeit I (15:00-17:00)

現代におけるハビトゥス論の代表的著作4篇を読み、討論を行った。

Norbert Elias: Über den Prozeß der Zivilisation.

Jürgen Habermas: Strukturwandel der Öffentlichkeit.

Gilles Deleuze: Differenz und Wiederholung.

Pierre Bourdieu: Die feinen Unterschiede; Ders: Die Regeln der Kunst.

Gastvortrag I (19:00-21:00)

Norbert Otto Eke: Habitueler Antiklassizismus: Christian Dietrich Grabbe und die

Kritik an Klassik und Romantik im Vormärz.

グラッベは規範的文学潮流と対決した作家であるが、特にゲーテとの確執は有名である。本発表は、彼が批判に際して文学市場において行った自己演出 (Autor-Selbstinszenierung) について、さらにはロマン派の作家たちとも距離の置き方が、ハイネやベルネといった「三月前期」の他の作家とも異なっていたことが論じられた。

第3日

Gruppenarbeit II (9:00-11:00)

Habitus und Ästhetik というテーマにそって、バロックから現代までの4人の作家の手になる作品をもとに、習慣が時代別にどのように捉えられているか検討した。

- 1. Christian Fürchtegott Gellert: Leben der Schwedischen Gräfin von G***.**
- 2. Friedrich Nietzsche: Die fröhliche Wissenschaft.**
- 3. Gottfried Keller: Kleider machen Leute.**
- 4. Botho Strauß: Jeffers Akt.**

Plenarvortrag II (14:00-17:15)

Yuri Komatsubara (Kanagawa Universität): Dada als Inszenierung eines neuen Menschen und eines neuen Habitus.

1920年代にベルリンとチューリヒの小劇場で活躍したダダイストが、新しい人間像、新しいハビトウスを表現しようとしていたことを論じた。ダダイズムが、彼らの批判する精神的人間と、パフォーマンスで表現される機械的人間の緊張の中で展開されたことがさまざまな写真によって紹介された。

Ami Ikenaka (Keio Universität): Zitieren als klassifizierte und klassifizierende Akte. Die Lesenden in E.T.A. Hoffmanns Lebens-Ansichten des Katers Murr.

E.T.A.ホフマンの『牡猫ムル』でムルが行う無秩序で不正確な「引用」は、彼の教養的俗物精神を表現している。それは、楽長クライスラーやアブラハムの引用が正確なものと対照的である。彼らのムルの引用に対する批判的コメントは芸術家と批評家の緊張関係を反映しており、こうした引用をめぐる駆け引きを通して読者も文学生産の現場へと導かれることが論じられた。

Marta Famula (Universität Paderborn): Der ästhetisierende Habitus. Über Schönheit und Verdrängung in Hugo von Hofmannsthal's Das Märchen der 672. Nacht.

ホーフマンスタール作品における美的実践としてのハビトウスは、社会的生からは疎遠な認識や主観的表現形態としてのそれであり、人間が本来の人間らしさを

喪失したことへの批判として機能していることが論じられた。

Hiroshi Yamamoto (Waseda Universität): Habitus im Zeitalter des globalen Neoliberalismus. Einige Überlegungen am Beispiel der neueren Texte Kathrin Röggli.

新自由主義の浸透による人間の個人性、主体性の壊滅的危機という問題に、カトリン・レグラの近年の文学テクストは自覚的に対峙しており、近代文学の重要な構成要素だった人間の内面世界と伝統的ハビトゥスがもはや通用しないことが論じられた。

Abendprogramm (19:30-22:00)

Filmaufführung: „Mustang“ (Türkei, 2015)

第4日

Gruppenarbeit III (15:00-17:30)

Sozialisierung durch Habitus というテーマで4つの文学作品を使ってワークショップを行った。

1. **Gotthold Ephraim Lessing: Emilia Galotti; Ders: Miss Sara Sampson.**
2. **E.T.A. Hoffmann: Der goldene Topf.**
3. **Friedrich Dürrenmatt: Der Besuch der alten Dame.**
4. **Ernst Jandl u. Friederike Mayröcker: Fünf Mann Menschen.**

Gastvortrag II (19:30-21:00)

韓国人招待講師による次の講演がおこなわれた。

Mi-Hyun Ahn (Mokpo National University/Südkorea): Schweizerischer (Anti-)Habitus bei Robert Walser.

スイス人作家 R. ヴァルザーはベルリンで活発な執筆活動を行ったが、それにはスイスとドイツにおける出版環境の差が大きな要因となっている。彼を一躍有名なエッセイストにしたのは大都市ベルリンの新聞業界だった。しかし同時に、ヴァルザーの作品の基調にある田園的なものへの憧憬は彼の自然観察によるものである。終生「散歩」を愛し、「触れあい」を通して世界と関わった作家の作品を二つの拮抗するハビトゥスから読み解いた。

第5日

Plenarvortrag III (9:00-11:30)

Daisuke Baba (Rikkyo Universität): „Fremdartige“ Literatur in der

„gewöhnlichen“ Literaturgeschichtsschreibung. Karl Florenz' Geschichte der japanischen Literatur aus wissenschaftsgeschichtlicher Perspektive.

明治時代に日本を訪れ、ドイツで最初の日本学教授となった Karl Florenz (1865–1939)は、当時有名だった G. Gervinus や W. Scherer のドイツ文学史に倣って『日本文学史』を書いた。本発表では新興国日本の文化をヨーロッパの学術世界に換骨奪胎させた Florenz の苦勞が紹介された。

Ludmila Peters (Universität Paderborn): Der Körper als Kampfplatz habituelier Praktiken – Habitus-Inszenierungen bei Christian Kracht.

身体は現代文学解釈の一つのキーワードである。ブルデューはハビトウスを「身体化した知と経験」と呼び、それをつくる場 (Feld) に作家は作家としての自己を演出するが、同時にその場は自己のアイデンティティーを求めて闘う場にもなる。現代作家の Christian Kracht の『Faserland』(1979)を例に、身体化するハビトウスの実践が、身体を逆に空疎なものにしていくことが論じられた。

Kanichiro Omiya (Universität Tokyo): Die Sprache der Toten. Die historische Dimension vom „Habitus“-Begriff und die „Pathosformel“ bei Aby Warburg.

アビ・ヴァールブルクの提唱した Pathosformel は、絵画に描かれた感情を表す可視的イメージのことであるが、そこにはハビトウスとの一定の相関関係を見ることが出来る。後者が社会規範の単純な反復ではないように、Pathosformel も古代からの形象表現の踏襲ではない。意志をもたない自動反復を拒みつつ、しかし伝統的表現から逸れないというパラドクスの上に成り立つ形式があることが論じられた。

Gruppenarbeit IV (14:30-16:30)

Habituation des Fremden というテーマで7篇の文学作品をワークショップで論議した。

1. **Theodor Storm: Pole Puppenspäler.**
2. **Maxim Biller: Der gebrauchte Jude; Ludwig Börne: Briefe aus Paris. (Nr. 74 vom 7.2.1832)**
3. **George Tabori: Die Ballade vom Wiener Schnitzel.**
4. **Herta Müller: Jedes Wort weiß etwas vom Teufelskreis; Hugo von Hofmannsthal: Chandos-Brief; Durs Grünbein: Ein Fax an Lord Chandos.**

Gastvortrag III (17:00-18:30)

Norbert Otto Eke: Unverwechselbarkeit: Habitus als Form. Herta Müllers ‚wilde Semiosen‘, Angela Krauß' Aussparungen und Clemens J. Setz' ‚Obertongesänge‘ im

literarischen Feld.

本講演では、表題にある現代作家3人にスポットが当てられ、彼（女）らの文体が、文学的要請にこたえるものであることのみならず、文学界における差異化戦略にもなっていることが多彩な例をもとに示された。続いてなされた質疑応答では、作家による朗読会や文学講義の意義といった事柄について、活発な議論がなされた。

Schlussfeier (19:30-21:00)

第6日

Schlussdiskussion (9:00-10:30)

総括と質疑応答

ゼミナールをふりかえって

14の口頭発表と4つのワークショップからなる、盛り沢山の内容を消化するためには大変な準備と集中力が要求されたが、会は終始、和やかで知的学術的な雰囲気にも包まれていた。若手研究者（修士・博士課程在籍者、ポスドク）21名が参加したが、Plenarvortragではやや緊張が見られたものの、ワークショップでは積極的に発言し、国際学会の雰囲気をつかむよい経験ができたものと期待する。参加者の学会投稿コラムは、会の和やかな雰囲気を伝えている。

<http://www.jgg.jp/modules/kolumne/details.php?bid=162#latterhalf162>

第60回、61回で特に留意した点は、以下の3点である。

1. **Schlussdiskussion** を最終日に置き、ワークショップを一回増やした。これによりテキスト研究の幅が広がり、テーマと文学作品との関連が明確になった。テキストの選択にはとりわけ精力を注ぎ、50以上あった候補作すべてを委員全員が精読し、20作を厳選した。
2. 近年 Powerpoint による発表が——とりわけ欧米研究者の間では——主流を占めるが、本会は特に依頼して、講演者全員に **Handout** を用意していただいた。これは非母語話者が参加者の大半を占める研究会では、特に必要な処置だとあらためて実感した。
3. ハラスメント防止の倫理規程を明確に掲げたことで、参加者により快適な滞在、研究環境を提供できたと自負している。

閉会後のアンケートでも参加者から、運営、口頭発表、ワークショップすべての項目で最高度の評価を受けた。しかしゼミナールの成功は参加者と運営委員の努力によるものだけではない。会に経済的支援をいただいた、日本独文学会理事会、

DAAD, ドイツ語学文学振興会にこの場をお借りしてお礼申し上げたい。

(文責：香田芳樹)

ゼミナール終了後、ドイツ人招待講師は以下の講演をおこなった。

講演 1

講演題目：**Der ‚eigene Kalender‘ des Erinnerns. Herta Müllers
‚Wahrheit‘ der erfundenen Erinnerung**

日時：2019年3月24日(日) 17時15分-18時45分

会場：慶應義塾大学三田校舎 東館4階オープンラボ

主催：慶應義塾大学文学部独文学専攻, 慶應義塾大学小泉基金

講演 2

講演題目：**Der ‚eigene Kalender‘ des Erinnerns. Herta Müllers
‚Wahrheit‘ der erfundenen Erinnerung**

日時：2019年3月25日(月) 15時30分-17時

会場：九州大学伊都キャンパス・イーストゾーン, イースト1号館1階 E-B-102号室

主催：日本独文学会西日本支部

講演 3

講演題目：**Ästhetische Ent-Ladungen? Lachen über das Entsetzliche? Über
komische Formen im Shoah-Diskurs**

日時：2019年3月27日(水) 午後3時より

場所：京都大学文学部第4講義室

主催：京都大学文学部独文研究室

第 24 回ドイツ語教授法ゼミナール報告

第 24 回ドイツ語教授法ゼミナールは、2019 年 3 月 15 日から 18 日の 4 日間、多摩永山情報教育センター（東京都多摩市）にて開催された。今回のゼミナールでは、イエーナ大学 (Friedrich-Schiller-Universität Jena) から Juniorprofessorin Simone Schiedermaier (以下「Prof. Schiedermaier」と称する) を招待講師として招いた。Prof. Schiedermaier は文学理論、地域研究理論とその教授法、および文学言語的テキスト分析を専門とする。また、イエーナ大学では DaF/DaZ 修士課程等において教鞭を執るなど DaF にも造詣が深く、外国語授業における文学テキストの応用をテーマに学術書をはじめ、数多くの論文を執筆している。

ゼミナールのテーマおよび参加者は以下の通りである。

総合テーマ：「ドイツ語の授業における文学テキストの使用 - 枠組と実践」
(Literarische Texte im Deutsch als Fremdsprache-Unterricht - Konzepte und ihre Anwendung)

参加者：Elvira Bachmaier (麗澤大学), *Cezar Constantinescu (上智大学), *Olga Czyzak (麗澤大学), **Ralph Degen (慶應義塾大学), 藤本純子 (北海道大学), Jan Hillesheim (Goethe-Institut), Anja Hopf (新潟大学), 犬飼彩乃 (首都大学東京), Markus Joch (慶應義塾大学), *鎌田ちひろ (上智大学), Nina Kanematsu (獨協大学), 柏木貴久子 (関西大学), Ruben Kuklinski (東京芸術大学), *草本晶 (麗澤大学), Angela Lipsky (上智大学), 松本蒼来 (慶應義塾大学), *森村采未 (大阪市立大学), *Frank Nickel (早稲田大学), 太田達也 (南山大学), 大木清香 (同志社大学), Manuela Sato-Prinz (DAAD Tokyo), *坂本真一 (中央大学), Anette Schilling (岡山大学), Maria Gabriela Schmidt (日本大学), 武井佑介 (麗澤大学), 田中慈 (上智大学), Bertlinde Vögel (大阪大学), Eva Wölbling (東海大学), Nancy Yanagita (麗澤大学), 吉田治代 (新潟大学) (アルファベット順, **実行委員長, *実行委員)

第 24 回ドイツ語教授法ゼミナールプログラム

	15.03	16.03	17.03	18.03
Vor- mittag		Workshop 1	Workshop 2	Workshop 3
Nach- mittag	Anreise Vortrag 1	Freie Gestaltung bzw. Austausch für Kooperation, Sammelband	Follow-Up für Kooperations- austausch Teilnehmer- vorträge	Abreise
	Teilnemervortrag	Vortrag 2	Vortrag 3	
Abend	Einstiegsparty	Teilnehmer- vorträge	Abschlussparty	

1. 招待講師による講演およびワークショップ

Prof. Schiedermaier による講演とワークショップは、4 日間で計 3 回ずつ行われた。講演は、「文学テキスト」「言語教育」を総合的なキーワードとし、毎回異なるテーマ（Literatur und Sprache, Literatur und Leser, Literatur und Diskurs）で進められた。また、ワークショップは、全て前日の講演と対をなしている。

近年、文学テキストはドイツ語教育において、翻訳訓練や異文化理解の教材など従来多く用いられた形だけではなく、文学テキストの独自性にも焦点をあて使用され始めている。従来、ドイツ語教育で文学テキストを扱う場合、多くは参加者の高い言語レベルを前提としていた。しかし、本講演では、全レベルに対する文学テキストの応用を題材としており、初級クラスやドイツ語を第二、第三外国語として学ぶ学生においても積極的に活用できる内容である。

【講演 1】

初日午後に行われた講演 „Literatur und Sprache“ では、文学テキストの使用を二つの角度から取り上げた。

まず、文法学習における文学テキストの使用に焦点をあて、グラフィック・デザインのような視覚的要素を含む „Konkrete Poesie“ や、狙った文法項目を集中的に取り入れた詩、また、見本となる文学テキストの一部を変え学習者が独自のテキストを作成する „Generatives Schreiben“ などが紹介された。文学テキストを文法学習に使用する試みは従来のドイツ語授業でも見られたが、ここでは、文法訳

読法のように単にテキスト翻訳から文法や文構造を理解するのではなく、学習者が自ら文学テキストを書き換えるなどより主体的な授業参加が期待されていることを学んだ。

次に、文学テキストの言語形式 (Form) に焦点をあて、言語形式が意味内容にも大きく影響を与えること、また、言語形式の表現には決まった形があるのではなく、話し手と聞き手によって形成されることが説明された。例として、ゲーテの詩 „Ein Gleiches“ や J. Erpenbeck の小説 „gehen ging gegangen“, C. Kramsch がアメリカにてドレスデン爆撃を題材に行った教員対象の研修内容が紹介された。同時に V. Sklovskijs の „Verfremdung“ (異化) をキーワードとし、文学特有の言語的、内容的な異化が読者 (言語教育であれば学習者) に新たな視点を与えることも指摘した。

【ワークショップ 1】

ここでは、前日の講演内容「文法学習を目的とした文学テキストの使用と言語的、内容的な „Verfremdung“」に焦点をあて、文学テキストを使用した教材作成、授業計画を行った。課題はグループワーク (全 8 グループ) で行い、最初の 2 時間を教案作成、次の 80 分を発表の時間とした。発表後、各グループへのコメントや質問、それに付随する討論が行われた。全グループのうち 5 グループが文法に焦点をあてた教案作成をしたが、従来の演繹的、説明的な文法学習ではなく、学習者が主体となり考える課題や文章を書き換える課題などのこれまでとは異なるアプローチが見られた。

【講演 2】

2 日目午後の講演では、 „Literatur und Leser“ というタイトルで、読者の役割やドイツ語授業における学習者に焦点をあてた具体的な教材作成の方法等が取り上げられた。 „Ein Text hat immer zwei „Autoren“ のように、文学テキストは筆者によってのみ作られるのではなく、読者もその一翼を担っていること、また、読者によってテキストの持つ意味が変化することが説明された。ドイツ語授業への応用では、 „handlungs- und produktionsorientierter Literaturunterricht“ を基とし、具体的な 28 個の例からなる „Handlungskasten“ が紹介された。例として、文学テキストを起点とし「作者に手紙を書く」「登場人物の目線で日記を書く」「ストーリーの最後を考える」など様々な学習者主体の課題が提案されている。この方法については、文学テキスト自体に焦点をあてていないという批判もあるが、同時にこういった課題こそ学習者の言語的創造力を高めるという主張もある。このような文学テキストを起点とした課題は、学習者の言語レベルを問わず授業に取り入れら

れるものであり、初級レベルを担当する多くの教員にとっても実用的な方法である。

この講演では „Interkulturelle Lesergespräche“ にも焦点をあてた。例として、カフカの „Heimkehr“ を用い、諸文化間で文学テキストの解釈にどのような違いがあるかを学んだ。

また、講演の後半では、文学テキストに現れる „Fremdheit“ についての説明があった。

【ワークショップ 2】

このワークショップでは、講演 2 の内容、特に „Handlungs- und Produktionsorientierung“ と „Fremdheit“ をテーマに教材作成、授業計画を行った。ワークショップ 1 同様、グループワーク（全 7 グループ）にて課題に取り組み、教案作成、発表、各グループへのコメントや質問、それに付随する討論が行われた。ここでは、特に前日の講演 2 で配布された „Handlungskasten“ をベースとした教材作成、授業計画が多く見られた。

【講演 3】

3 日目午後の講演では、 „Literatur und Diskurs“ をテーマとし、文学テキストと地域研究 (Landeskunde) について取り上げた。文化や歴史理解のドイツ語授業への導入は以前から行われているが、文学テキストを使用することで単に情報としてではなく、主観性や感情も同時に組み込めることが説明された。また、文学テキストの地域研究や文化理解における使用方法として、一つの文学テキストで完結せず、複数の同じテーマを扱った文学テキストを同時に使用する „Textnetz“ が紹介された。ここでは、 „Flucht und Migration in der Gegenwartsliteratur“ を例とし、4 つの異なる視点から書かれた文学テキストが用いられた。また、講義の後半では、上記で扱った文学テキストから、実際にゼミナール参加者が参加し „Zugehörigkeit“ について体験、議論した。

【ワークショップ 3】

ここでは、Prof. Schiedermaier がイエーナ大学にて実践する „Textnetz“ を用いた教材の分析をグループワークにて行った。後半は Textnetz に関して、あるいはこれまでのゼミナールの内容について自由にディスカッションや振り返りが行われた。

2. 参加者による発表

初日、2日目、3日目の夜または午後に、参加者による発表が行われた。発表のタイトルは以下の通りである。

- Jan Hillesheim: Modell für literarische Schreibwerkstätten im DaF-Unterricht unter Einbeziehung von Autoren*innen
- Junko Fujimoto: Eile mit Weile, aber ohne Langeweile – vielseitige Anwendungsmöglichkeiten kurzer Lesetexte im Deutschunterricht
- Maria Gabriela Schmidt: Erwartungshaltung zwischen Motivation und Demotivation beim Fremdsprachenlernen in Japan
- Nina Kanematsu: Der Holocaust mit den Augen eines Kindes – Ansätze zum Einsatz des Jugendromans „Malka Mai“ von Mirjam Pressler im Deutsch als Fremdsprache-Unterricht an japanischen Universitäten
- Anette Schilling: Warum literarische Texte in einen kommunikationsorientierten Sprachunterricht gehören (発表順)

また、2日目午後には参加者が関心のある研究テーマについて、共同研究者を募る機会も設けられた。今回提案されたテーマは „Japanisches auf Deutsch“ と „Hörbücher“ である。

3. 総括

第24回ドイツ語教授法ゼミナールでは、Prof. Schiedermaierによる各講義をベースとし、その後のワークショップにて文学テキストをどのようにドイツ語授業へ組み込むかを実際の教材作成や授業計画を通し熟考、議論した。多くは学習者の言語レベルを限定せず、ドイツ語授業への応用が可能であった。さらに、文学テキスト自体に焦点をあてるか、または文学テキストを起点とするかなど学習者の興味や状況に合わせ使い分けができることも非常に実用的であった。今回、DaF、文学を専門とする両参加者が混在したが、Prof. Schiedermaierの講演やゼミナール自体が非常にアットホームな雰囲気であり、国籍や専門にかかわらず活発な発言やディスカッションがみられた。

講演やワークショップ、参加者同士の話し合いを通し、今までとは違う角度から文学テキストのドイツ語教育における使用法を知ることができ、非常に有意義な時間であった。本ゼミナールで得た知識や経験が、今後のより良い授業運営につながると確信している。

なお、ゼミナール実施にあたっては、例年同様、DAAD、Goethe-Institut、ドイツ語学文学振興会から多大な支援をいただいた。この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。

(文責：武井佑介)

2018 年度ドイツ語教員養成・研修講座報告

1. 本講座の運営について

ドイツ語教育部会，東京ドイツ文化センターとの共催で開催している「ドイツ語教員養成・研修講座」は，2017 年 10 月から慶應義塾大学日吉キャンパス（関東会場）と立命館大学大阪いばらきキャンパス（関西会場）の 2 会場をテレビ会議システムで結ぶかたちで行っている。受講者は，ワークショップへの参加に加え，各モジュールのテーマについてレポートを作成し提出することが求められる。また，専用のプラットフォームである Moodle 上では，受講者同士，また受講者と講師の間でドイツ語教育をめぐるディスカッションが展開され，受講者・講師双方にとって，ドイツ語教育について再考する刺激的な議論の場となっている。

2. 2017 年秋開講のコースについて

2017 年秋開講のコースは，前期が 2017 年 10 月から 2018 年 7 月までの 8 回のワークショップで 4 モジュールならびに *Deutsch Lehren Lernen* の課題，後期が 2018 年 10 月から 2019 年 9 月までの 8 回のワークショップで 7 モジュール，計 11 のモジュールからなる。現在は後期コースが開催されており，16 名（関東会場 6 名，関西会場 10 名）の受講者が参加し，2019 年 7 月の時点で第 7 回ワークショップまで終了した。

後期コースのワークショップ開催日，モジュールのテーマならびに講師は以下のとおりである。

後期コース(2018 年 10 月—2019 年 9 月)

ワーク シ ョ ッ プ	日付	ワークショップとモジュールのテーマ	
		前半	後半
1	10 月 6 日	外部講師による講演	M5: 様々なメディアと ICT の導入 岩崎克己，田原憲和
2	11 月 17 日	M5 のレポートの評価と討論	M6: 文法とコミュニカティブ・アプローチ 太田達也，星井牧子

3	12月15日	M6 のレポートの評価と討論	M7: 自律学習・協調学習, 学習方略 境一三, 森朋子
4	1月26日	M7 のレポートの評価と討論	M8: 動機づけと意識調査 藤原三枝子, 吉村創
5	4月20日	M8 のレポートの評価と討論	M9: フィードバックと評価 太田達也, Marco Raindl
6	5月25日	M9 のレポートの評価と討論	M10: 授業計画, 実験授業の準備 草本晶, 吉村創
7	7月20日	M10 のレポートの評価と討論	M11: カリキュラムとシラバス 松岡幸司, 鷺巣由美子
8	9月21日	M11 のレポートの評価と討論	講座の総括 修了パーティー

3. 新規開講のコースについて

2019年10月に新規コースが開講する。詳細については、2019年8月までに日本独文学会ウェブサイト上に掲載する予定である。

日本独文学会研究叢書既刊一覧

Nr. 132 Erinnerungsliteratur nach 1945. Medien, Kontroversen, Narrationsformen

[1945年以降の想起の文学—メディア, 論争, 物語形式—]

編集者: Markus Joch

執筆者: Kentaro Kawashima, Markus Joch, Yoshiko Hayami, Leopold
Schlöndorff

発行日: 2018. 9. 29

Nr. 133 中世文学における身体描写の逆説的レトリックを巡って

[Zur paradoxen Rhetorik der Körperdarstellungen in der mittelalterlichen
Literatur]

編集者: 伊藤亮平・渡邊徳明

執筆者: 伊藤亮平, 渡邊徳明, 嶋崎啓, 山崎明日香

発行日: 2018. 9. 29

Nr. 134 Literaturtheorien in der Anwendung

[実践における文学理論]

編集者: Arne Klawitter

執筆者: Arne Klawitter, Thomas Pekar, Yuji Nawata, Robert Wittkamp

発行日: 2019. 5. 26

Nr. 135 情報構造と話し手の状況把握

[Informationsstruktur und Sprechereinstellung]

編集者: 森芳樹

執筆者: 山崎祐人, 伊藤克将, Christian Klink, 林則序&森芳樹

発行日: 2019. 5. 27

支部報告

北海道支部

○2019年夏の研究発表会は、8月26～29日北海学園大学にてアジアゲルマニスト会議開催のため実施を見送った。

○次回第87回研究発表会は、12月7日（土）北海道大学にて開催の予定である。

○6月1日時点での会員数は71名となっている。

東北支部

○東北ドイツ文学会第62回研究発表会を2019年11月9日（土）東北大文学部にて開催予定。

○『東北ドイツ文学研究』第61号の論文等執筆募集中。2019年11月30日〆切。

関東支部

○2019年6月9日（日）に学習院大学にて総会が行われ、新幹事会（任期2年）が発足した。分掌は次の通り。

支部長 今村 武

支部選出理事 前田 佳一

会計 山本 潤

広報 桂 元嗣

庶務 日名 淳裕

○2019年11月24日（日）に第10回関東支部研究発表会を成城大学にて開催する。発表者を募集中。締切は9月15日。詳細は支部HPを参照のこと。

東海支部

○2019年度日本独文学会東海支部夏季研究発表会

日時：7月13日（土）14時より

場所：名城大学天白キャンパス・共通講義棟東3階 H-301 教室

1. 研究発表

前田織絵：ムージルの『黒つぐみ』について ―一つの解釈の試み―

太田達也：ドイツ語の冠詞の用法に関する明示的指導および非明示的指導の

効果

2. 講演会

吉川美奈子：映画に見る東西ドイツ

○公演「エミーリエ・フレーゲ ～愛されたミューズ」

日時：2019年5月18日（土）

場所：南山大学G棟G30教室

主催：南山大学ヨーロッパ研究センター，共催：日本独文学会東海支部，南山大学外国語学部ドイツ学科，協力：オーストリア大使館/オーストリア文化フォーラム

第1部 16時30分～17時30分

座談会「世紀末ウィーン×芸術×女性—グスタフ・クリムトとエミーリエ・フレーゲ」

西崎紀衣（豊田市美術館学芸員）

前田朋美（名古屋大学非常勤講師）

西川智之（名古屋大学大学院人文学研究科教授）

第2部 17時45分～18時45分

ひとり芝居「エミーリエ・フレーゲ ～愛されたミューズ」

出演：マクシ・ブラーハ

演奏：ゲオルク・ブクスホーファー（エレキベース）

演出：ハイデリンデ・カツツィンガー

○支部会員数 125名（2019年7月13日現在）

京都支部

○日本独文学会京都支部 2019年度春季研究発表会

日時：2019年6月29日（土）13時30分より17時20分まで

会場：龍谷大学深草キャンパス22号館302教室

参加者数：約50名

研究発表

1. エンツェンスベルガー『点字』における詩と社会の関係をめぐる問題
——テーオドル・アドルノへの批判的応答——

橋本紘樹（京都大学非常勤）

司会：細見和之（京都大学）

2. 『コリントの花嫁』における歪められた自己としてのヴァンパイア

森口大地（京都大学非常勤）

司会：細見和之（京都大学）

3. コミュニスト・ナイト・フィーバー！

——東ドイツのディスコがつくるポップカルチャー——

高岡智子（龍谷大学）

司会：川島隆（京都大学）

○京都支部ホームページの新設

2019年5月1日より開設した。 <http://jggkyoto.org/>

○学会誌『Germanistik Kyoto』について

2000年より年1回刊行。2019年8月頃に第20号刊行予定。

2018年発行の第19号掲載論文は次の通りである。

アルフレート・デーブリーン『たんぽぽ殺し』と精神医学

—理解できる狂人と理解できない健常者—

籠 碧

冷たさ，苦痛，有機的構成

—1930年代初頭のエルンスト・ユンガーにおける

「政治の美学化」言説について—

稲葉 瑛志

○「読み切りブックレット・ドイツの文化」について

2016年度から始まった事業で，京都支部がゲルマニスティクに関する学術業績を広く社会に紹介するために刊行するブックレット。応募資格者を専任職のない支部会員に限定し，一刷の費用を支部が助成。2019年度からは翻訳も対象としている。

○秋季研究発表会・総会は11月24日（日）京都府立大学で開催予定。

○2019年度支部役員

支部長：松村朋彦（京都大学）

支部選出理事：河崎靖（京都大学）

編集委員：田原憲和（立命館大学），吉田孝夫（奈良女子大学）

渉外広報委員：羽根田知子（京都外国語大学），細見和之（京都大学）

会計委員：熊谷哲哉（近畿大学）

庶務委員：川島隆（京都大学）、谷口栄一（大阪府立大学）

○2019年7月4日現在の会員数は146名

阪神支部

○2019年3月25日に機関誌『ドイツ文学論攷』第60号（全84ページ）を発行した。掲載論文・書評等は以下のとおり。

◆論文

- ・大杉奈穂：他者との「神秘的合一」の向かう先—ヘルマン・ヘッセ『荒野の狼』における仮面舞踏会の描写について
- ・北岡志織：演劇で難民を「代理」する—イエリネク *Die Schutzbefohlenen* のテキスト・上演比較による一考察

◆研究ノート

- ・土屋邦子：政治的文脈でE.T.A.ホフマンの『誓願』を読み解く試み

◆書評

- ・高井絹子（著）：『インゲボルク・バッハマンの文学』

竹田和子

◆マルジナリア

- ・溝井裕一：ドイツ語圏の人びとゆかりの水族館を訪ねて

○Simone Schiedermaier 教授（イエーナ大学）講演会

日時：2019年3月27日（日）17:00～

場所：関西学院大学 大阪梅田キャンパス 1402 教室

テーマ：Flucht erzählen – Zur Arbeit mit Textnetzen

参加者：9名

○第69回総会・第228回研究発表会

日時：2019年4月6日（土）13:30～

場所：神戸大学 六甲台第2キャンパス 瀧川記念学術交流会館

参加者：35名

1. 総会

1) 幹事諸報告

2) 審議事項：

- ・2019年度予算について
- ・現会長・幹事の任期延長について

日本独文学会の一般社団法人化に伴い、理事選出時期を日本独文学会にあわせるため、現会長・幹事の任期を例外的に1年延長し、2020年度までとすることが提案され、承認された。

2. 研究発表会

- 1) 村山功光 (関西学院大学) : テキストと図像の相互作用—『グリム童話集』扉絵の肖像画
- 2) 竹田和子 (大阪音楽大学) : 『ガルテンラウベ』における E.マルリット作品に描かれた家庭崩壊とその社会的背景 — 『商業顧問官の家』と『石榴石の髪飾りの女』を中心に

3. 講演会

Hans-Joachim Solms 教授 (ハレ大学) : Germanistik und Philologie

○第229回研究発表会

日時 : 2019年7月20日(土) 13:30~

場所 : 神戸大学 六甲台第2キャンパス 瀧川記念学術交流会館

参加者 : 27名

Symposium

„Neue Horizonte der Übersetzung in der Gegenwartslyrik“

1. Henrieke Stahl (Universität Trier): Eine poetische Übersetzung aus der Sprache der Natur: Christian Lehnerts „Baumgespräche“ und Les Murrays „Translations from Nature“ als Antwort auf das Anthropozän
2. Hiroshi Yamamoto (Universität Waseda): „des karpfens - der muskulöse sohn zerrt rebhuhn“. Zum sprachenkontaminierenden Übersetzungsverfahren Oskar Pastiors
3. Claus Telge (Universität Osaka): Experimental Forms of Translation in Contemporary German Poetry
4. Hiroko Masumoto (Universität Kobe): Der Übersetzungsbegriff in Yoko Tawadas Frühwerk

このシンポジウムは、DFG (ドイツ研究振興協会) の大型プロジェクト DFG-Kolleg-Forschungsgruppe FOR 2603 „Russischsprachige Lyrik in Transition: Poetische Formen des Umgangs mit Grenzen der Gattung, Sprache, Kultur und Gesellschaft zwischen Europa, Asien und Amerika“ (代表者 : Henrieke Stahl 教授, Universität Trier) との共催で開催された。

○2019年7月20日現在の会員数は250名

中国四国支部

○第 68 回総会・研究発表会を 2019 年 11 月 9 日（土）に高知大学（朝倉キャンパス）を会場として開催予定。

○2019 年 7 月 1 日現在の会員 83 名，賛助会員 5 社。

西日本支部

○講演会（共催）

日時：2019 年 5 月 13 日

場所：九州大学伊都キャンパス

講師：Prof. Dr. Winfried Menninghaus (Max-Planck-Institut für empirische Ästhetik)

演題：Lust an negativen Gefühlen in der Kunstrezeption

参加者：20 名

○九州ドイツ語スピーチコンテスト 2019 年（協賛）

Deutschsprachiger Redewettbewerb in Kyushu

日時：2019 年 7 月 13 日

場所：福岡大学

ドイツ語教育部会報告

1. 総会

2019年日本独文学会春季研究発表会（会場：学習院大学）に合わせ、2019年6月8日（土）にドイツ語教育部会2019年度総会が開催された。議題は以下の通りである。

I 報告事項

1. 2018年度活動報告
2. 2018年度決算報告
3. その他

II 審議事項

- 1) 会則の変更について
- 2) 2019年度予算について
- 3) 監事嘱任について
- 4) その他

III 会員からの意見開陳

このうち、「II 審議事項」の「1) 会則の変更について」では、太田部会長より、2020年に実施される選挙で選出される役員の任期に限り2023年3月までとするという付則を設けることが提案され、承認された。加えて、参列者より日本独文学会の一般社団法人化に伴う表現の変更が提案され、日本独文学会理事会の確認を経た上での変更を行うことが承認された。なお、具体的な変更箇所は以下の下線部の通りである。

第1条（省略）

2. 本会は一般社団法人日本独文学会（以下、「日本独文学会」）に帰属する。

（省略）

[付則]（役員の任期に関する特例措置）2020年の選挙において選出される役員の任期に限り、これを嘱任した通常総会から2023年3月までの期間とする。

2. 本付則は2023年4月1日をもってこれを削除する。

「II 審議事項」の「2) 2019年度予算について」は、原案通り承認された。また、「3) 監事嘱任について」では、2018年度の監事2名（黒田晴之氏、山川智子氏）のうち黒田晴之氏の任期が満了となったため、2019-2020年度監事として西

川智之氏が推薦され、承認された。

2. 編集

『ドイツ語教育』第23号を2019年3月20日に発行した。第23号では特集「複言語・複文化教育の現場から」および同テーマのフォーラムを組んだ。

3. 企画

1) 2019年度の第1回ワークショップを開催した。

日時：6月15日（土）11:00-13:00

場所：南山大学

講師：Oliver Bayerlein（南山大学）

テーマ：Smartphone im Unterricht Deutsch als Fremdsprache: Mündliche Sprachproduktion mit Hilfe einer App

2) 2019年度日本独文学会春季研究発表会1日目の6月8日（土）14:20～17:30にドイツ語教育部会企画シンポジウムを開催した。

テーマ：インクルーシブ教育と外国語教育

パネリスト：

齊藤公輔（中京大学）	インクルーシブ教育とドイツ語教育の現場
山路朝彦（獨協大学）	多様な学生との共生を前提とした教育組織の構築
村上加代子（甲南女子大学）	英語教育のユニバーサルデザイン実現に向けた課題
中川正臣（城西国際大学）	韓国語教育におけるインクルージョンをいかに実現していくか

4. 大学入試問題検討委員会

2019年日本独文学会春季研究発表会1日目と2日目に2019年度大学入試問題を展示した。

5. ドイツ語教員養成・研修講座

日本独文学会および東京ドイツ文化センターとの共催で開催されている「ドイツ語教員養成・研修講座」は、2017年10月より関東会場（慶應義塾大学日吉キャンパス）および関西会場（立命館大学大阪いばらきキャンパス）を会場として開催されており、2019年9月に2017～2019年期の講座が終了する。

会員数（2019年5月20日現在）は、正会員492名、準会員59名、賛助会員：10団体の計561名である。

<文責 境一三>

2018 年度全国大学院 Germanistik 関係論文題目

大学名および氏名は 50 音順です。学位取得は、断り書きがない場合は、2018 年度下半期をあらわします。

博士論文

立教大学

二藤 拓人：断片・断章フラグメントを書く ― 初期フリードリヒ・シュレーゲルにおける
書記の実践と思考の諸相

修士論文

慶應義塾大学

荒木 萌：ドイツにおける難民の社会統合プロセス：ドイツ語学習と社会参加に
焦点を当てて

訃 報

日本独文学会ならびにドイツ語教育界の発展にご尽力くださいました次の方が
お亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

沼崎 雅行 殿 (2019. 1. 20)

市川 伸二 殿 (2019. 1. 28)

富岡 近雄 殿 (2019. 7. 16)

あとがき

ニュースレター（ドイツ語名 JGG-Info-Blatt としました。名称についてのご意見、ご提案、ご批判をお待ちしております）をお届けします。このニュースレターは、学会の財政が厳しいことから「別冊」のオンライン化を図るべく新しく作られたものです。前理事会の決議により「別冊」は2019年春号をもって印刷媒体による発行を終え、それまで別冊に掲載されていた情報は、会員のみなさまの便宜を考え、1. 別冊の後継である「ニュースレター」、2. 研究発表会にかかわる情報をまとめたもの、3. ゼミナール等の告知、発表募集の3つに分けて提供する予定です。後者二つに関してはこれまでも学会ウェブ上に掲載されていたので、ウェブ化にともない重複を避けるという意味もあります。また、この他に総会招集の通知など、会員の皆様すべてに伝えなくてはいけない情報（すべての情報は会員全体に向けられているのですが、社団法人としての日本独文学会では会員（社員）に伝えなくてはならない情報があるということです）については、学会の各種案内の機会に郵送にてお届けする予定です。また、ウェブによる情報収集は基本的に行わないという方のために要望があれば印刷したニュースレターもお届けすることも検討しております。

今回の措置については、たぶんに試行的なものであり、今後会員への最適な情報提供の仕方を探っていきたいと考えておりますが、そのためにも会員の皆様からのご意見、ご要望等をお寄せいただけたらと思います。「別冊」は、学術振興会の機関紙補助の基準によりそれまで機関紙に掲載していた情報が掲載できなくなることから生じた *Notlösung* という側面もあったと思いますが、十数年を経てこの間数々の改良を施され定着してきたものであります。今回の「ニュースレター」についても、媒体の特徴を生かし、会員の皆様の声を反映した形で、今後よりよいものを作っていきたいと考えております。

どうか、末永く(?) よろしくお願いいたします。

(田中 慎)

編集

一般社団法人 日本独文学会庶務委員会

宮田 眞治（委員長）

川島 建太郎（編集担当） 白井 智美（編集担当） 橘 宏亮（編集担当）

田中 慎（編集担当） 成田 節（編集担当）

編集・発行

一般社団法人 日本独文学会

170-0005 東京都豊島区南大塚

3-34-6 南大塚エースビル603

電話03-5950-1147

振替00160-9-135018

E-Mail（メールフォーム）：

<http://www.jgg.jp/mailform/buero/>

ニューズレター2019 年秋号

JGG-Info-Blatt / Herbst 2019

2019 年 8 月 20 日発行